

ピンクの悪魔（亡霊）

空たん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お腹を空かせた幽々子はこの世界でなにをするのか・・・

目次

編入編

1食	食の対価	1
2食	わた飴が食べたい	5
3食	食いしん坊	12
4食	不味いわよ!!	17
5食	可愛いな妖夢	24
6食	美味しくない	29
地獄の宿泊研修編		
7食	明日が楽しみなね・・・	33

編入編

1 食 食の対価

【食の対価】

私は西行寺幽々子。

白玉楼の主、冥界に住む亡霊の管理者。

由緒正しい我が西行寺家であるが今、大きな問題に直面している。

「どうしたのですか？幽々子様、食事の時間にはまだ早いと思いますが・・・」

妖夢の物言いに少しむっとしてしまう

「失礼ね妖夢、私が常に食べ物のことを考えているとでも？」

・・・お腹すいた

「食事のことではないわ、ちなみに今日は何を作るのかしら？」

べ、べつに夜ご飯が気になったわけではないんだからね

「今日は洋食に挑戦しようと思いましたが十六夜殿から学んできました」

洋食！いつもは和食だから新鮮だわ

「楽しみね、それとは別に大事な話があるの」

「食べ物以外の話をするなんてあなたは本当に幽々子様ですか?！」

「妖夢、私でも怒る事もあるのよ・・・」イライラ

「すみません」

笑顔で語りかけると素直に謝ってくれた

「わかればよろしい」

やつと本題に入れるわね

「今、西行寺家始まって以来の窮地に陥っているわ」

「そ、そんな!?、いったい何があつたのですか!!」

「それは・・・」

妖夢は喉を鳴らし私の言葉を待っている

恐らく私の真剣な表情のせいで緊張感が増しているのね

「それは、食費が底をつきそうなの」

「え・・・」

ふふふ、事の重大さに言葉も出ないようね

妖夢は震えながら下を向いている

「幽々子様、たった、たったそれだけのことで西行寺家の窮地だとおっしゃりたいのです

か!？」

「それだけとはなによ! 私にとつては死活問題よ!!」

「死活問題つて・・・私はともかく幽々子様は幽霊じゃないですか!

幽霊である幽々子様は本来、食事を必要としないのですよ!？」

事の重大さを理解していない妖夢は反論してくる

「そ、そんなあく。御飯がないと死んでしまうわ」

「もう死んでいらつしやるでしょう!!」

「うう、いつから妖夢はこんなにも冷たくなつてしまったの・・・」よよよ

泣きまねをするが妖夢の顔は険しいままだ

「泣きまねしたつて食費はどうにもなりませんよ」

「そうなのよね・・・」

「やっぱり働くしかないのでは?」

「なん、だと」

「この子は言つてはならないことを

「やーだー! 働きたくなーいー!」

「はあく仕方ありませんねえ」

「え?」

妖夢は深い溜息を吐く

「私が出稼ぎをしてまいりますので幽々子様は安心してください」

「妖夢・・・」

どこことなく悲しげな雰囲気醸し出している

「もしかして何かやりたいことでもあった？」

「づっ」

当てずっぽうで言ったけど本当だったなんて

「なにかしてみたい事でもあるのかしら？」

「じつは・・・」

2食 わた飴が食べたい

「わた飴が食べたい」

妖夢は気まづそうに呟いた

「じつは・・・学校なるものに通ってみたいと思っていました」
「学校？ 寺子屋ではなくて？」

学校・・・初めて聞く単語ね

「幽々子様のご友人である紫様にお聞きしたのです

『外の世界には学校という教育受けられる施設があるの』と
それ以来気になってしまっって・・・」

外の世界ね・・・

「妖夢、もし外の世界に行けるとしたら学校に通ってみたい？」

「はい！・・・はっ！いい、いえ私は幽々子様の従者であつて、
それに食費だつてなんとかしないと・・・」

ここは私が頑張ろうかしらね

「大丈夫よ、私がなんとかしてあげるわ

それに妖夢が初めて言ったわがままですもの、主として叶えてあげたいじゃない?」
今の私、すごくカッコいいわ!これがカリスマね!

「ゆ、幽々子様ああ!!」(; ∇ ;)

涙を流しながら私に抱き着いてくる

「可愛いな妖夢!」

私も優しく抱擁する

「聞いているわよね?紫」

視線を上に移して紫を呼ぶ

「呼んだかしら?」

「ずっと覗いていたくせに白々しいわよ」

「あらそう?」

昔からの友人である八雲紫と軽口をかわす

「話は聞いていたとうりよ、白玉楼と一緒に私たちを外の世界に送ってくれないかしら」

「ふふっ、お安い御用よ

「お金の方は1年分ほど用意してあげる・・・もちろん幽々子基準でね」

「あら、助かるわ」

「それと、幽々子にはとある場所で働いてもらうつもりだから

また連絡するわね」

「わかったわ」

私が働くことになるなんてね

妖夢から離れて縁側に座る

「記憶をなくす前の私は何をしていたのかしらね・・・」

私は西行妖を見ながら誰にも聞こえない声で呟いた

「幽々子様！」

紫と話をしていると妖夢からお呼びがかかった

「お食事の準備が整いました！」

「ありがとう妖夢、あと食事がすんだら出発するから準備しておいて」

「はい」

食卓に着き、並べられている料理を見る

「はい、これは?！」

普通の10倍はありそうな特大オムライス!しかも半熟だわ!

「えへへ、前に食べたいとおっしゃっていましたが、作ってみました」

頭をかきながら照れている妖夢・・・可愛い

「あら？ 私にも用意してくれたの？」

横を見ると紫の分（普通サイズ）が置かれていた

「はい！ どうせならご一緒したいと思ひまして」

「そう、ありがとう」

全員が席に着いたのを確認し、合掌する

「では、いただきますしよう！」

「いただきます」

トロトロの半熟卵にスプーンを入れ、一口分をすくいとりと口に運ぶ

「美味しい・・・」

半熟卵がケチャッププライスを包み込み酸味を抑えつつ甘みを引き出している

「美味しいわね」

どうやら紫の口にもあつたらしく私は鼻が高くなる

「妖夢の料理は美味しいですよ！」 ドヤア

「貴女が作ったんじゃないですよ」

「あはは、ありがとうございます紫様」

そのまま食は進んでいき私が一番早く食べ終わった

「2人ともゆっくり食べすぎじゃない？」

「幽々子（様）が早すぎるのよ（です）」
なんで私させられるの

全員が食べ終わり、一息ついたところで時間がきたらしい

「じゃあ外の世界に送るけど準備はいいかしら？」

「はい！かまいません！」

「私からは一ついいかしら？」

「いいわよ」

どうしても聞きたいことがある

「私たちを外に送って何がしたいの？」

「それわね・・・」

紫は扇子で口元を隠して微笑んだ

「ひ・み・っ？」

そう言うのと私たちは隙間に呑み込まれ、気づいた時には外の世界だった

「・・・紫には困ったものだわ」

次会ったときは絶対に殴ってやると決意して

外の世界をふみだs ググウ・・・

「妖夢くお腹すいた」

「先ほど食べたばかりじゃないですか」

「むくけち」

「私が悪いのですか!?!」

「こうなったら、このわた飴みたいな白いの食べようかしら」

妖夢の半霊を掴み、口元に持っていく一度食べたいと思っていたのよ

わた飴みたいで美味しそうだったのよね

「わかりました!今すぐ用意しますので半霊を食べるのは冗談でもやめてください!」

冗談ではなかったけれど

「しかたないわね」

半霊を離すと素早く妖夢の元へ逃げに行った

心なしか涙を浮かべているように見えるのは気のせいだと思いたい

まあ、世界を見て回るのは明日からでもできるわよね

そつと目を閉じ、料理ができるのを待った

3食 食いしん坊

【食いしん坊】

こちらの世界に来てから一週間、未だに紫からの連絡が無い
そして、最近の妖夢は楽しそうにしているし

何を聞いても「秘密です」の一点張りなため諦めた

とにかく紫からの連絡が来ない限り何も出来ないため
おやつを食べながらのんびり過ごす日々が続いている

「幽々子様、お茶のご用意が出来ました」

「ありがとうございます」

目の前に置かれたお茶を飲む

「・・・あら？」

いつもより美味しい？

「妖夢・・・お茶っ葉を変えたのかしら？」

「いえ、いつもと同じものを使用しますが、どうかなさいましたか？」

「何も無いわよ？ただいつもより美味しかったから」

「そうですか」

妖夢はどこか嬉しそうに机を挟んで向かい側に座った

二人でまったりとした時間を過ごしていると妖夢の横に隙間が出現した

「久しぶりね幽々子」

隙間から姿を現し、当たり前のように座る

「妖夢、お茶を入れてあげて」

「はい」

「それで、何をしに来たの？」

「仕事を持って来てあげたのに態度が大きいわね・・・ありがとう妖夢」

「私は何をすればいいの？」

記憶をなくす前は知らないが今まで仕事なんてした事がない

四季映姫から冥界の管理を任されているがほとんどすることはなく

暇を持て余しながらお茶を飲むぐらいいしかしていない

「ふふっ、貴女にピッタリの仕事よ」

幽々子には『遠月学園』という学校で教師をして欲しいの“食べる”専門のね」
「食べる専門？それは仕事になるの？」

「ええ、貴女は料理学校で美味しさの評価をするだけでいいの

しかも、それ以外は何もしなくていいわよ」

「料理を食べるだけでお金が貰えるなんて、そこは天国かしら」

「ちなみにその学校に妖夢を通わせる予定だから」

「妖夢が料理の勉強をするなんて、今まで以上に美味しいご飯が食べられるのね！」

「楽しみだわ！」

「お任せください幽々子様！」

「じゃあ幽々子、ついて来てちょうだい、遠月学園に連れて行くわ」

「ええ」

紫は隙間を開き中に入るよう促す

「お留守番お願いね」

「任せてください」

隙間に入り目を閉じる

「着いたわよ」

相変わらず便利な能力だと思いつつ目を開ける

「ここは？」

「遠月学園、総師の部屋よ」

「いかにも儂が総師の薙切仙左衛門じゃ」

仙左衛門に続き私も自己紹介をする

「西行寺幽々子、料理は出来ないけれど食べるのは大好きよ」

「うむ、時に西行寺殿」

「何かしら？」

「白玉楼に所縁ある者だろうか？」

「よくわかったわね、私は白玉楼の主人をしているわ

どうして知っているかお聞きしても？」

「知っているも何も我が家の隣に突然現れたではないか」はっはっは

「それは初耳だわ」

紫にジト目を向ける

「あら？知らなかったわ」

「白々しい」

「して、お主を教師にするにあたって一つテストをしたいと思う

おーい持ってこい！」

仙左衛門は扉に向かって叫ぶ

すると扉が開きメイドらしき人たちが料理を運んでくる

その量はかなり多い

およそ大きなテーブル五つ分つてところか

「遠月には多くの生徒が在籍しておつてな、1日に大量の料理を食さねばならん

そこで、ここにある料理を全て食べ切ってもらう」

「この量を？」

「そうじゃ、無理はせずに「ごちそうさま」もいいぞ・・・え？」

部屋いっぱいにあつた料理が一瞬にして消えたことに仙左衛門は冷汗をかいている

「ご、合格じゃ今年度から教師として迎えよう」震え声

「意外と簡単だったわね」

こんな量でいいなら楽勝だわ

「ゆ、紫殿

よく食べるとは聞いておつたが一瞬であの量が消えたぞ」コソコソ

「よく食べる子でしょ？」クスクス

むく声く声が小さいからよく聞こえないわ

4食 不味いわよ!!

「不味いわよ!!」

「ここが試験会場」

初めての経験に胸の鼓動が治らない

しかし、こういった学校に通うチャンスを与えた幽々子様の為にも必ず受かってみせる

「そこで何やってんだ？」

「うえ?!」

自分に喝を入れている最中に突然声をかけられた為

変な声を上げてしまった

「お前も試験受けるのか？」

「そ、そうだが・・・」

「なら一緒に行こうぜ」

「わ、わかった」

「どうやら同じ受験者だったらしい

「俺、幸平創真、よろしく!」

「魂魄妖夢です」

「魂魄つてなんか呼びづらいな妖夢でいいか?」

「構いません」

「じゃあ妖夢、行こうぜ」

「どうやら悪い奴ではなさそうだ

入り口のドアを開け道を進んでいく

試験会場と思われる場所に着くと教室を埋め尽くすほどの人がいた

「こんな受けんのかすげえな」

「そうですね、やりがいがありそうです」

「お前って意外と熱い奴なんだな」

「別に普通だと思いますが」

幸平と雑談を交わしていると急に生徒たちが雪崩のごとく教室から出て行った

もう試験が始まったのか?と思いいながら周りを見渡すが

まだ始まってはいないようだ

「受験者は〃0〃ね

緋紗子、今日は試作のスイーツを作ろうと思うのだけれど試食を頼めるかしら」
「はい、喜んで！」

「どうやら私たちに気づいていないらしい」

「あ、あn「あのかく試験受けたいんだけど？」」

私に被せるように幸平が試験管らしき女性を呼ぶ

「私が試験官と知って試験を受けようとするなんてよほどの自信家なのかしら？」

「あるいはただの馬鹿かしら？」

「は？知らねえよ、妖夢は知ってるか？」

「私も存じ上げません、すみません」

「貴様ら！雑切えりな様を知らないと言うのか!!」

御付きと思われる女性がすごく怒っている

「すみません」

「うん、知らね」耳ホジホジ

「貴様ら!!」

「緋紗子、いいわ試験を受けてあげるわ

内容は先ほど言ったとおり」卵」を使った料理で私を唸らせたら合格よ」

卵・・・何を作ろうか迷うな・・・

しかも試験ということは普通の品を出せばいいというものではないだろう
ならばあれしかないな!

作る料理を決め食材に手を伸ばす

作業をすること数十分先に完成したのは私のようだ

完成した品を試験官の所に持っていく

「これは?」

「出汁巻卵です」

自分の料理を自信満々に差し出す

「・・・あなた、私を舐めているの?こんな庶民料理、食べる価値もないわ!」

「え?!そんな、困ります!」

「そんなこと私には関係ないわ」

「・・・わかり、ました」(・・・ω・・・)

私は料理を下げる

すみません幽々子様

折角のチャンスをもノにできませんでした

「何してんだ?」

「幸平・・・私は不合格だった」

「不合格って食ってすらねえじゃん！それっておかしくね？」

「いえ、私の実力不足ですのでお気遣い・・・なく」

話している最中、我慢できずに涙が一つ流れてしまった

「・・・ちよつと待ってろ」

「え？」

幸平はそう言い残し、試験管の元へ向かった

ここからでは遠くてよく聞こえないが

身振り手振りを見るに幸平が煽っているようにも見える

そこから料理を食べさせるように促していった

「おあがりよー！」

雑切殿は渋々お茶碗を手に取り一口食べた

すると目を見開き勢いよく掻き込みだした

幸平がニヤニヤしながらその光景を見ている

・・・意地の悪い

そして気になる判定は・・・

もう確信しているだろう幸平は笑みを崩さない

「不味いわよ!!」

そういつて去ってしまった

「嘘おとおお!!」

え?あれだけ美味しそうに食べて置きながら?

幸平はこちらに振り向き

「すまん、俺も落ちた」ヘラヘラ

「ふふ、何ですかそれ」

試験が終わり、片付けはしなくていいといいと言われていたので

そのままにしておく

荷物をまとめて外に出る

「では、私はこっちの道なのでここで失礼します」

「おうーじゃあな!」

幸平と別れことにより、今まで抑えてきたものが溢れ出てきた

「情けない、情けない!情けない!」

あれだけ私に期待を寄せて下さったのにそれに応えることができなかった

滝のように涙を流しながら自分を責める

「半人前な私では荷が重かったようです、幽々子様」

「何が重たいの？」

「?!幽々子様!!何故ここに!？」

いつの間にか幽々様様がすぐ後ろにいたことに驚いてしまった

「さつき教師になる為の試験を受けていたの、妖夢は？」

「私は・・・編入試験があり、ここまで足を運んでいました」

「へ〜結果は？」

「・・・です」

聞き取れなかったらしく聞き返してくる

「ん？」

「不合格です！」

そう言うと、逃げるように駆け出した

5食 可愛いな妖夢

【可愛いな妖夢】

あれから妖夢をなんとか落ち着かせ不合格の理由を聞き出した

「紫……私許せないわ」

「幽々子……私も同感よ」

「お仕置きが必要のようね」 ふふふふ

二人して不気味な笑みを浮かべる

「明日が楽しみね」

「ええ」

翌日

「行くわよ、隙間を開けてちょうだい」

「もうできているわ」

「カチコミじゃ!!!」

「紫様！幽々子様！おやめください！」

「止めないで妖夢、ちよつとOHANASSIしてくるだけだから」

「私は大丈夫ですから落ち着いてください」

「・・・仕方ないわね」

妖夢に止められ仕方なく計画を中止する

「あら？やめてしまうの残念ね」

「本当にいいの？」

「はい、元々は私の不甲斐なさが生んだことなので

もう気にしてません」

あきらかに気にしているようだが妖夢がいつて言うのだから

主人として我慢してあげないと

「わかったわ、ただし、今日のご飯は豪華にしましょう！」

「わかりました」

時間が経ち妖夢が作ったご飯に舌鼓を打ちながら

妖夢のこれからを紫と相談する

「遠月に通えないとすると他にどこがあるかしら」

「そうねえ、私も妖夢が落ちるなんて考えても見なかったから
何も思いつかないわ」

「そもそも妖夢の料理の腕で落ちるほうがおかしいのよ」

思い出しただけでも怒りが噴き出してくる

「そうよ！妖夢でダメならこの世界の料理人はゴキブリ以下よ！」

紫の私の意見に賛成のようだ

「そ、そこまでの腕はありませんよ?!」

「妖夢は自己評価が低いのよ、もっと自信を持ちなさい」

「・・・はい！」

「・・・ところで、さっきから戸を叩く音がするけどいいのかしら?」

紫にそう言われ、耳を澄ますと確かに叩く音がする

妖夢との会話に夢中で気づけなかったわ

「妖夢、お願いできるかしら?」

「わかりました」

「幽々子様、薙切仙左衛門という方が会いたいと仰ってますが」

「わかったわ、通してちょうだい」

妖夢に案内された仙左衛門が私たちの前に現れる

「西行寺殿、こんな時間にすまぬな、急用がありここへまいった」

「急用？」

なにかしら？がっこには四月からのはずだし

何もすることはないはずだけれど

仙左衛門はかしこまった顔になった

「この度は儂の孫娘がそちらの魂魄殿に失礼を働いてしまった

誠に申し訳ない」

そう言つて深々と頭を下げる仙左衛門

「あなたが謝ることでもないでしょう？」

私は直接本人に会つて謝つてもらうから」

「むう・・・わかった

それともう一つ魂魄殿の料理を食した結果じやが、文句なしの合格じや

あれ程の料理を食べたのは久々じゃわい」

え？てことは・・・

「妖夢は学校にいけるってこと？」

「そうじゃ、これほどの才能を逃してしまうのは勿体無い」
「・・・そう」

「儂の用事は終わったゆえ、失礼する」

そう言つて出て行つてしまった

「ゆ、幽々子様・・・」

「ええ・・・おめでとう妖夢」

「幽々子様ああああ!!!」

妖夢は泣きながら抱き着いてきた

「もう・・・可愛いな妖夢！」

6食 美味しくない

【美味しくない】

時間がたつのは早いもので、最近まで枯れ果てていた木々たちが花を咲かせていた

「やっぱり春になつてもこの桜は咲かないのね」

どれだけの年月が経とうとこの西行妖が咲くことがない
咲かせようと試みたことはあつたけれど

こわしい巫女に阻止されてしまい失敗に終わった

「幽々子様〜！遅刻してしまいますよ！」

「ええ」

咲くことのない西行妖に見送られ屋敷を出た

・・・長い・・・入学式にどれだけ時間かけるつもりなの？
しかも仙左衛門が一人で長々と話しているだけだし

「さて、儂の話は終わりじや」

仙左衛門の話が終わり、会場に安堵の表情が見える

次に編入生の紹介に入った

赤髪の生徒が最初に出てきて何かいっているが

全てを無視して妖夢を記録する為に買ったビデオカメラを準備する

なぜか空き缶やらゴミなどを投げられていたが気にしても仕方がない

次は妖夢なのだから

妖夢が裏から出てきたところでビデオを回す

「はじめまして、魂魄妖夢です

私は学校なるものは初めて通うのですが

至らぬ点がございましたらご指導お願いします」

妖夢の演説に思わずウルツときてしまった

入学式も終わりこれから授業があるらしく教室に案内された

「西行寺殿は自分が思うように授業してくれればよい」

「わかったわ」

「料理が不味ければ容赦無く切り捨てて構わん」

「ええ・・・容赦しないわ」ふふっ

仙左衛門の言葉に思わず笑みが溢れる

教室に入り、まずは自己紹介

「私は西行寺幽々子、今年から入った教員よ

早速だけど今回のお題はくうーん・・・『肉じゃが』にしようかしら」

これなら妖夢基準で評価できるはずだからね

「あともう一つ付け加えるわ、1人10人前よういしてもらいます

品は同じでもバラバラでもいいわ

私を満足させる美味しさなら評価Aをあげるわ・・・

時間は1時間、調理開始！」パンツ

開始の合図で手を叩く

それを聞き生徒たちが動き出す

あれから40分程たつただろうかやつと一人目の生徒が料理を持ってきた

出された品を食べ進めていく・・・不味い

しかし出された料理を残すのは妖夢に怒られるから残すことはしない

10人前をあつという間に食べえたことで周りは唾然としていた

「美味しくくない・・・」

「え、でも全部食べてるじゃないですか」

「私は出された料理は全部食べきるようにしているの」

「あなたの料理は食べていて苦痛すら感じたわ評価はEしかありえないわね」

「え?!まだ時間があります!作りなおさ「黙りなさい」」

「ここでは私が絶対よ、次の人きなさい」

それから不味い料理を出す者ばかりのため

50人全員に"E"評価をつけて初の授業は終わりを告げた

地獄の宿泊研修編

7食 明日が楽しみね・・・

〔明日が楽しみね・・・〕

妖夢 side

私は授業で危なげなくA判定を取り続けたが、幸平は食戟とやらをしたらしいそんなことよりも明日から宿泊研修が始まるため手早く課題を終わらせ帰路につこうと

したところへ、正面から薙切さんがこちらに向かってきた

「少し、時間をもらえないかしら？」

「・・・なんですか」

正直、彼女への苦手意識があるため少しキツイ言い方になってしまふ

「魂魄妖夢！ えりな様に失礼だぞ!!」

「・・・」

「いいのよ緋紗子・・・仕方ないことよ

私は食べもせず彼女の料理を否定したんだもの」

「えりな様・・・」

どうやら私を無視して二人だけの世界に入ってしまったようだなら帰ってもいいだろうか

「ようが無いみたいですので帰ります」

そのまま彼女たちの横を通り、歩き始める

「ちよ、ちよつと待ちなさいって」

「なんですか？早く明日の準備を したいのですが」

流石にイライラしてきました

「あなた、私の配下に入らな ぐごめんなさい興味がありません」・・・最後まで言わせなさいよー」

「ではこれで」

今度こそ帰路に着いた

「ただいま帰りました」

「よくむくもう我慢できないくあの生徒たちの料理が不味すぎるく」うわくん
「はあく」

毎日愚痴を聞かされるこつちの身にもなつてくださいよ・・・

「仕方ありませんよ、それが仕事なのですから」

それに授業終わりに私が口直しの為に料理を作っているじゃないですか
「そうだけどく」

「頑張ってください、明日から高級ホテルでの仕事なんですから」

きつと美味しい料理もたくさんありますよ」

「本当！」パー

美味しい料理と聞いて顔を明るくさせる幽々子様

「ちよろい」ボソツ

「むく聞こえたわよ妖夢」

「やば・・・」

「明日が楽しみね」

幽々子様の顔はてゐのよゝな悪巧みを考える顔だった

遠月リゾートホテル

「・・・ね、眠れなかった」

幽々子様が何をしてくるかが気になって眠りにつくことができなかった

「なんだ妖夢じゃねえか、今日が楽しみすぎて眠れなかったのか？」ケラケラ

「そういうわけでは無い、ただ主人が何かよからぬ事を考えているのでは無いかと・・・」

「お前の主人は何をしている人なんだ？」

「遠月の教員をしている」

「ほくならずつげえ料理がうまいのか？」

「いや、食べる専門です」

幸平は知っていますか？今年の1年生、約100人ほどが退学になったのを

「・・・知ってるぜ、酷い教師だよな」

「その人が私の主人です」

「まじかよ」

「あの人、どうやら私を基準にしているらしくて家でずっと愚痴ばかりこぼすんですよ」
「お、おう地味に自慢すんだな」

「・・・それで昨日、少しやらかしてしい怒らせてしまったんです」

「ほくん、まあ頑張れよう」ケラケラ

「みよーん」(・ω・)

(宿泊研修のくんだり遠月卒業生の紹介など)が終わりステージ前に

四宮シェフが立つ

「その刀持った銀髪のやつ」

「私?」

「いや、隣の茶髪のやつだ・・・てかなんで刀持ってたんだよ」ボソ

「俺ですか?」

ようがあつたのは隣の男子生徒らしい

「お前クビだ」

「え!？」

ふむ、四宮シェフの話によると髪を染める染料の臭いに問題があるらしい卒業生たちの話が終わりさっそく試験が始まることになった

「お、妖夢もこの会場なのか!」

「つくづく縁がありますね」

「はい、今回は今ここにある物を使って和食を一品作ってもらいます」

「ここにあるのって・・・何もありませんが」

と誰かが口にする

「あるじゃないですか」

そう言う窓の外を見て

「この自然から自分たちで調達してください」
なるほど

「では2人1組になって・・・あら?1人余ってしまいますね」

どなたか1人でもいいと言う方はいないかしら?」

「私は1人でも構いませんよ」

1人の方が動きやすそうだし・・・

「そう？頑張ってね！制限時間は2時間じゃあスタート！」パンツ
手を叩く合図で一齐に生徒たちが外へ駆け出していく

「この光景はデジャブを感じますね・・・」